模索期の女性語

高　崎　みどり

現在、日本語における女性語は、一つの転換期を迎え、手さぐりの状態にあるのではないかと考える。その模索期にある女性語の様相を、各種のデータや資料を基に、明らかにしてみたいと思う。

Ⅰ　男女のことばの接近

男女のことばづかいが接近しつつあるという認識は、かなり多くの人々が持っている。1974年に、国立国語研究所が東京都民639人（男299　女340）に実施した調査が、江川清「現代人の話し言葉」（注1）に引用されているので紹介してみる。まず、

1. 現在の日本では男性のことばと女性のことばはあまり違わないようになってきている。
2. 男性と女性のことばは今でも大いに違っている。

この2つの意見のどちらに賛成か、という設問に対しては、性別・年齢別・学歴別にかかわらず、全体の6割強の人が、1の方の意見を支持する結果になっている。すなわち、ことばの男女差が小さくなったという認識を各層の人が持っていることになる。

次に、男女差の小さくなった理由については、全体の半数以上が、

男性のことばが女性化し、女性のことばも男性化したから。

と答えており、＜女性のことばの男性化＞のみを理由にあげたものは、全体の4割強であるという。ただし、この、理由に関しては、年齢層による違いがあって、40歳以上の高年齢層では、＜女性のことばの男性化＞を理由とするものが第1位を占めているのに対し、若年齢層では、上に掲げたような、＜男女のことばの歩み寄り＞を理由とする者が多い、ということである。そして、＜男性のことばの女性化＞のみを理由にする者は、性別・年齢別を問わず一定で、全体のほぼ6％にすぎない、という。

すなわち、言葉の上での性差が縮まっているという認識は、多くの人に共通し

ているが、その縮まり方の捉え方が若干異なっており、“男女の歩み寄り”と捉える者が半数以上、そして“女性の側の男性化”と捉える者も4割いるということに注目したい。

さて、同調査では、将来についての予想（「男女のことばの違いはこの先どうなると思うか」）と理想（「男女のことばの違いはこの先どうなるべきだと思うか」）についても聞いている。その結果をまとめると、「全般的に見れば、男女の言葉の差は、現在と同程度かそれ以上に違いが大きくなるのが望ましいことではある」（理想）けれども、「現状から考えると恐らく今程度かあるいは今よりももっと差が小さくなるだろうと考えている」（予想）人が多いという。ここでは、理想と予想のズレが注目される。というのは、どんなふうに縮まるのかの捉え方をも考え合わせると、＜男女のことばの歩み寄り＞や＜女性のことばの男性化＞という傾向がこの先続くだろうが、これ以上その傾向が進んでほしくない、あるいは後戻りしてほしいくらいだと考える人が多いことを示していると思われるからだ。そうした、いわば男女のことばの接近に対して働くブレーキのようなものは、いくつかの調査からも見てとることができる。

Ⅱ　接近に対して働くブレーキ

1979年にNHKが、全国の16歳以上の国民3,600人を対象に行った「ことばに関する意識調査」のうち、「男性語化した女性のことばに対する印象」（注2）に関して、次のような若い女性どうしの会話の録音を聞かせて印象を聞いている。

A：ねえ、これどう思う？　似合うかな？
B：どれ、ウーン、それよりこっちのほうがいいと思うけどな。
A：そうねえ……、この柄、ちょっと変わっているけど……。
B：ウーン、似合う、似合う。こういうのあんまりないよ。
A：ウーン、でも、これ高いんじゃない？
B：いやァ、今こんなもんよ。
A：じゃ、思いきって買うか。
B：そうすれば。ボーナス出たんだし……。

これを聞いて、「あまり感じがよくない」とする者64.6％、「感じが悪い」とする者13.2％で、否定的に感じる人が多く、「感じがよい」（1.9％）や「まあ感じがよい」（13.7％）とする人を、はるかに上まわっている。しかも、性別ではあまり違いはないが、年齢別では、若い世代の方に感じがよくないと答える者が多く、10代後半では、「あまり感じがよくない」（71％）と、「感じが悪い」（21％）を合わせると、9割をこえる者が、否定的評価をしている。

実際、自分もこのような言葉遣いをしていたり、又、同世代の女性がこのように話しているのを聞き慣れたりはしていても、アンケートの設問の仕方によっては、規範意識の方が強く働くのであろうか。また、殊に、録音資料では、声のトーンや抑揚や速度が好悪の感覚に訴えることが多い。極端な例だが、「～ダワ」（資料中にはない）が「もう秋ダワ↘」と下降調で言い納める時と、「もう秋ダワ↗」と軽い上昇調で消えがちに言いなす時では、意図も、聞き手の印象も異なる。前者のような言い方は筆者の出身地（名古屋）では男性もよく用いる。女性語の特徴というのは、感嘆詞や間投詞、終助詞や終助詞的機能を持った助動詞・連語など、ニュアンスの強く出やすいことばに集中的にあらわれており、文字面では捕捉し難い。逆に言えば、非女性語的終助詞であっても、発声の仕方である程度和らげて、ニュアンスをこめることができる。数年前ピークを迎えた、「～ワァー、～デェー」と引き気味揚げ気味に文節末を発声する方法は、考えながら話すという時間かせぎの他に、整理された硬い調子を和らげたいという欲求も含まれていたと考えられる。

話を戻して、そうした、設問方法や録音資料に偏りを助長する面があったという可能性を考慮に入れても、この会話に対しては否定的評価をする人が多かったと言ってよいだろう。すなわち、男女のことばの接近に対するブレーキである。ことばの上で、女性が男性に近づくことについてのブレーキであり、男性からも女性からも同じようにブレーキがかけられ、若年層にその働きが強かった。

同様の現象は他にもある。やや古いデータではあるが、1952・53年に国立国語研究所が上野市・岡崎市で行なった「敬語と敬語意識」の調査での結論の1つは、（注3）

女は男に対して、若い人は老人に対して、下層の人は上層の人に対して、そ

れぞれていねいに言うべきであると意識（期待）されている。
というものであるという。

また、1964年に同じく国立国語研究所が東京・大田原・奈良・高松の4都市で実施した708人（男335人　女373人）を対象とするアンケート調査（注4）で、「女性は男性よりも、ていねいな敬語を使うべきだ、という意見があります。あなたはこの意見についてどう思いますか。」という問に対し、この意見を支持するのは全体の61.4％、否定するのは27.4％、であるという。男女間に支持率の差はほとんどなく、年齢別・職業別の相違の方が際立っているということだ。30歳以下の若い人たちの支持は38.5％、また、農林漁業・サービス商工品販売などでは72.1％と76.7％、先生・医者・弁護士などの教育・専門職で48.1％の支持率であるという。だが全体として、女性が男性よりていねいに言うべきである、という意識は相当強力なものである。

そういう意識を持ち、また男性の側から期待もされている女性自身が、敬語を少なくしてゆくという方向にはためらいを見せているというデータがある。同じ調査で、「敬語を使うとどうしても話が長くなりがちです。世の中はだんだん忙しくなっていくと思います。だから敬語をだんだん少なくしていった方がいいという意見があります。あなたはこの意見についてどう思いますか」という問に対し、支持する者は全体の26.3％（男32.5％　女20.6％）、否定する者は39.4％（男41.4％　女37.7％）で、どちらともいえない、とする者も多く、全体で22.9％（男14.9％　女30.2％）という結果になっている。つまり、敬語の簡略化には、男女とも反対の者が多いが、殊に女性の側に、否定ないしは迷いの気持を持つ者が多いということになる。

また同調査で、上品に言う時の「オ」（「オ大根」「オめがね」）についても聞いており、なるべく「オ」をつけた方がいい、とする者は全体の7.7％（男8.6％　女6.9％）、なるべくつけない方がいい、とする者は全体の44.0％（男51.6％女37.2％）、どちらとも言えない、とする者が全体の35.5％（男30.1％、女40.4％）であるという。全体として「オ」をつけることは支持されていないが、どちらかといえば、女性の方が、「オ」をつけない、ということに対して迷いやためらいが大きいようである。

女性の言語生活が、敬語と密接な関連を持つものであるならば、冒頭に述べた、ことばの上での男女の接近ということは、少なくとも女性が敬語を簡略化するという方向では、なされ難いのではないか。また、録音資料に基く調査でみたように、男性語化するという方向も実際は抵抗が大きいようだ。これらを接近に対して働くブレーキと考えると、女性の側に女性自身に対してブレーキをかけるケースは見られたが、積極的に“脱女性語化”をはかろうとする動きは見てとることができない。

それでは、多くの人々が実感し予想している男女のことばの上での接近は、どのような方向に求めてゆけばよいのであろうか。

そのことを考えてゆく1つの手がかりとして、少し時間をさかのぼって、接近現象が意識される前の、男女のことばの差異が明確に確立していた頃のことを考えてみようと思う。

Ⅲ　江戸と明治の女性の言葉

男女のことばの上で接近しつつある、という認識そのものは、ずっと以前からあるものである。戦後に限っていうと、たとえば、雑誌『言語生活』28号（筑摩書房　1954）において、ロシア文学者湯浅芳子氏が、「日本語の女言葉」という一文で、次のように述べておられる。

> きくところによると、このごろ若い女性たちの遠慮のない間では言葉使いがたいへん荒っぽく、男の子のようになってきているとか。わたくしも実際そういう会話を耳にしたことはある。戦後の混乱や男女共学がこれの大きな原因となっているらしく、ひとつの過渡期的現象とも云えるだろうが、しかしこれはまた、半封建的日本から近代的日本へ移ってきている一証左ともみるべく、このようにしてやがて時ととも、男女の言葉使いが形の上でしだいに接近し、やがて長い年月ののちにはその相異をなくしてしまおうということは十分考えられることである。とはいえ、女が男になりえないように、形の上では同じ言葉使いを用いても、女の調子、男の調子というものは生理的相違とともに永久になくなるものでないこと、云うまでもない。

34年経過した現在、〝過渡期〟は終わったのであろうか。あるいは、34年間というのは、〝長い年月ののち〟とは ── 変化のめまぐるしい現代という時代にあっても ── とても言えないのであろうか。あるいは、今現在あることば上の性差は、“生理的相異”のような“女の調子”であるのか。いろいろと考えさせられる指摘の多い一文である。ともかく、30年以上前にも、男女のことば上の接近が現象としてあり、ますます接近してゆくだろうという予想があったということがわかる。

それでは、この“接近現象”が起こる前、つまり、男女のことば上の差異が大きかった頃というのはいつ頃なのであろうか。少なくとも身分制度が確立し、「女重宝記」などがあった江戸時代には差異があって、明治時代に入ると徐々に縮まってきたような、漠然とした感じが私にはあった。しかし、そう単純なものではないことを、最近の「東京語における男女差の形成 ── 終助詞を中心として」(小松寿雄 『國語と國文學』 昭和63年11月号) で教えられたので簡単に紹介したい。小松氏は、

> 東京語の男女差は、遅くとも明治の末には完成している (むろん、現代東京語の男女差とは相違する点もある)。その様子は、漱石の描く若い知識層男女の会話に生々と示されている。ところが、ここに描かれたような男女差は、一般に江戸語には現れない。

とされて、「漱石『三四郎』の男女差を終助詞を中心にまとめ、それらが江戸語でどうなっているかを、化政期の『浮世風呂』 (文化6～10年)、幕末・明治初期の『毬唄三人娘』、『安愚楽鍋』で調べ」るという方法で、「～ダ／ダワ／ダゼ／……～ネ／～ナノ／ワヨ」など24種の終助詞を調査された。その結果、

1. 現代東京語において、女性語ないしはそのかたよりのあるものは、『浮世風呂』では男女ともに用例がある (高崎注:「ネ」「ノヨ」「体言＋ヨ」など) か、まったく用例がないかである。
2. 現代東京語において、男性語ないしはそのかたよりのあるものは、『浮世風呂』では男女ともに用例がある (高崎注:「サ」「ナ」「ゾ」など)。ただし、その幾つかでは、上層女性不使用の傾向が始まっている (高崎注:「ダゼ」「ダゾ」「ダナ」「ゼ」など)。

という傾向が見られ、幕末・明治初期の状態も、この『浮世風呂』の頃とほとんど変わらない、という。そして、

東京語文末辞の男女差は、明治以降三十年代までに作られたものであろう。それは、明治東京語の形成とほぼ重なる、というよりもその一環として行われたものと考えられるのである。

と見る。加えて、明治20年代の女学生言葉「～コトヨ」「～ダワ」等と、江戸語における同形のそれは、連続的なものとは見なしがたく、女学生言葉は、江戸語と違う音調やニュアンスで発音されたものと見る。

以上のような内容であった。すなわち、江戸期と明治期は、ことばの男女差という点では区切りをつけて加える方がよいようだ。今の東京語の男女差は、少なくとも終助詞については明治初から30年代までに形成されたものであるという。前に述べたように女性語はニュアンス的な語が多いということを考慮に入れると、終助詞は、女性語の有力な指標の1つである（注5）。上述のような調査結果をそのまま女性語の消長にあてはめるのは危険だが、可能性としては明治30年代までにほぼ今の女性語が形づくられたと言えるだろうか。

もしそうだとすれば、男女のことばの上での接近が言われだした頃 ── おそらくもっと以前に溯れるだろうが ── たとえば先の湯浅氏の指摘の時期1954年を考えると、今の女性語というのは50年か60年程度の期間しか明確な確立をみていないということになる。これは仮定の上に成り立つ仮定で、このことに関しては更なる研究が待たれるところであるが、今は、他の資料から補なってもう少し考えてみたい。

Ⅳ　専業主婦と有職女性

この章では二つの調査をもとに話をすすめたい。まず、1963年、国立国語研究所が松江市民688名（男296名、女392名）を対象に行った調査である(注6)。調査前日の言語行動を、各自が自分でチェックしたものを基に、男女別世代12群について図示したのが図1である。（注7）

家で話す、職場（学校・会合）で話す、その他の所で話す、聞く、読む、書く、の6領域に分けた言語活動の行なわれ方を、年代別及び性別に示したものである。

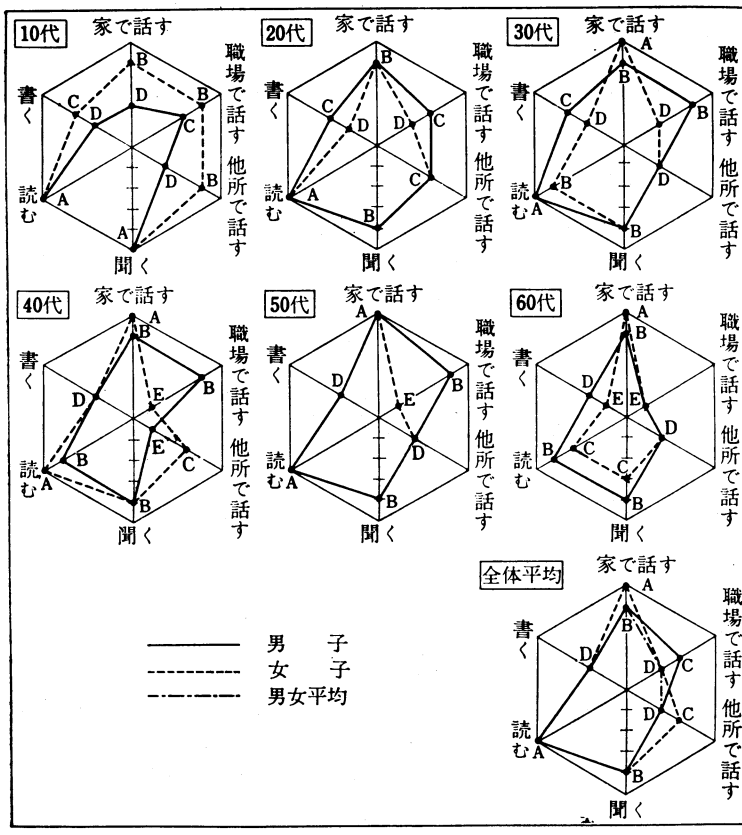

図1．6つの要素によって描いた松江市民の
言語行動のタイプのスケッチ

図形の外側に行くほど、その言語活動が活発に行なわれていることを示す。

この図から、10代女子の活発な言語活動が、20代女子では、はやくも男子の内側に入ってしまうこと、30代から女子は家で、男子は職場でと分化し、40代女子では読む活動や、その他の所（店・訪問・受付・立ち話……）で話す活動が増えて、男子の輪の外側へと伸びようとする勢を示すこと、50代では職場「学校・会合）の1点を除いて男女が接近、60代では男子も縮むが女子も再び男子の内側に入ってしまうこと、などが読みとれる。

女子の言語活動が男子の言語活動と異なるポイントは、職場（学校・会合）で話す活動（会議・質問・相談打合せ・雑談……）が不活発なこと、そして、書く活動も活発でないことである。この両者とも「読む」や「聞く」に比べて能動的な言語活動であり、家や店で話すより緊張感を伴うものでもあろう。すなわち、職場という場を持たない、いわゆる専業主婦は、言語活動の面でも当然そのことが質のちがいとして出てくるわけである。人生における成長・充実期といえる20代30代に能動的な言語活動の蓄積ができないとすれば、40代で外に向かおうとしても、10代のような活発さはとり戻せない。

すなわち、言語活動の面における男女差というのは、実際は有職・無職という差異にすぎず、男女の本来的なもののみではないことが確認される。そしてその言語活動の差異が、実際のことば使用の諸側面に影響を及ぼすことは当然考えられよう。

そのことは、次の男性と有職・無職の女性を比較した分析でよりいっそう明確になる。

「まじり合う男女のことば ── 実態調査による現状」（川口容子　『言語生活』429　1987）という論文では、『女性の敬語の言語形式と機能』（注8）の中からの資料を使った興味深い分析がされている。同じ職場（放送局、出版社）に勤務する22～55歳の男性32人と女性51人、および同年代の専業主婦30人を対象に、アンケート方式で、「いついくのか」ということを尋ねる際の言い方のヴァリエーションを調べた資料が用いられている。

分析の結果を見ると、まず、職場での男性・女性のことばは似ているものが多い。

すなわち、ヴァリエーションとして出てきた「行くの？／行く？／いらっしゃいますか？……」などの言い方は、男性専用・女性専用の少数の言い方を除いて、ほとんど両性によって使われている。また、相手の人物カテゴリーでも、職場の後輩・同僚に対する言い方を最高使用比率でみると、男女とも40～50％の人が「いくの」を使用、先輩に対しても男女とも30％前後の人が「いきます」を使用している。このことから「これら三者（高崎注：職場の後輩・同僚・先輩）に関する限り、職場での男性・女性のことばは、おおむねその使用がまじり合っているといえる」という考察がなされている。

次に、主婦も加えて、私的場面の相手（近所の人、父母会での父母）に対することば遣いを見ている。近所の人に対しては、男性、働く女性の最も多く使う言語形式が「いきますか」で一致しているのに対し、主婦は「いくの」と「いらっしゃいますか」の二つの形式を、同じくらい多く使う。父母会での父母に対しては、三者とも「いらっしゃいますか」を最も多く使うことは共通している。しかし、働く女性はそのパーセンティジが高く、同様に多く使う形式も「いらっしゃいます」であること、主婦はパーセンティジ自体が低く、同様に多く使う形式が「いかれますか」であること、さらにほとんど同じ比率で「いかれるの」「いきますか」が使われ、同じ人物カテゴリーの相手に対していろいろな表現を使っていること、などが見てとれる（注９）。こうしたことから、「男性、働く女性、主婦の三つのグループを比べると、その中でも働く女性は、最高使用比率を示すことば（＝最も多く使う言語形式　高崎注）が男性とまじり合っていることがみられる」という結論が導き出されている。

つまり働く女性は、職場でだけでなく、私的場面においても、男性と共通する言語形式を多く選ぶ傾向があるといってよい。

加えて、同論文には、婦人服売り場の男性店員（注10）と看護学校の男子学生の美化語（「おつめ（＝丈を詰めること）／お直し」「おくすり」）使用の例も紹介されている。これもまじり合いの例とされる。

以上のことから、女性特有と見られる言語活動や言語形式の多くの部分は、有職・無職の差という、社会的位置のちがいからくるものであることが考えられる。

そして、まじり合った部分というのは、“脱女性語”“脱男性語”というもので、“脱性的語彙”とでも言うべきものと思われる。男性が上の例のような美化語を使う場合などは、その職業での専門用語、接客マニュアルとして使用しており、女性語化を目的とするものではない。また、丁重に言うことが必要で、「～でございますね」等の言い方を男性がする場合も同様である。すなわち当たりの柔かさや丁寧さが、ある場面で必要とされた時、そういう表現が女性語の中にたまたまあったということだ。それらは当たりの柔かさや丁寧さを評価されて、“女性”の部分は削除される“脱性的語彙”として働いているのだといえよう。このことについては後でもう一度ふれる。

V　“専業主婦”の誕生と女性語

さて、女性の中での有職・無職の対立を見てきて、第Ⅲ章に戻ると、そうした無職の女性、専業主婦と言われる女性の出現と、今の女性語の形成とを重ね合わせて考えることになる。これは女性学で「性別役割」と言われる問題で、今、そのことに立ち入る余裕はなく、

> 日本で性別役割の意識が出てきたのは、日露戦争後、資本主義がある程度の段階に達し、工業化、都市化の進行とともに、雇用労働者が増え、サラリーマン家庭が誕生して以降のことである。「主婦」という言葉が文学や雑誌に表われるのは明治40年代。大正期の資本主義の成熟と、大衆ジャーナリズムの興隆の中で、「青鞜」に端を発した女権思想の後を追って、主婦という階層の意識化は近代化のひとつの現われとして登場してきた（注11）。

とか、

> 近代化の過程で産業化と職住分離の結果、公的領域が生産に、私的領域が消費にそれぞれ特化し、おのおのの領域に男と女が性別役割固定するに至った。伝統的家族観は、産業化以降（日本ではたかだか100年）の伝統にすぎない。前近代の農耕社会では、一家は生産を共同する「労働団」（梅棹忠夫）だったのであり、生産と生活への性別特化は起こりえなかった（注12）。

等を引用するにとどめる。

すなわち、江戸時代の少なくとも商家や農民といった庶民層には無かった、専業主婦という立場が、明治以降徐々に形成されてゆくのとほぼ平行して、今の女性語の多くも形成されてゆき、〝主婦〟という意識や役割の中で独自の深まりを見せていったと考えられる。主婦の内からは、男女の区別の少ない庶民層との差異化、厳しさの軽減した家事労働の中の自己の存在価値として、品格の維持や子供に対する模範、〝女性〟の強調などの要求があり、外からは良妻賢母教育などの要請があった。

Ⅵ　女性語に対する批判

しかしながらそうした女性語は、男性の側からも、女性自身の内からも、批判的に見られるようになってきた。

広義の女性語を対象としたものではあるが、1954年に心理学者の木村俊夫氏は「女性の心理とその言葉」（注13）という論文で、女性の言葉や言語行動の特色を心理と結びつけて示されている。簡単に紹介してみることにする。（以下、カッコ内はその心理学的分析）

- 表情豊か／自己中心的に語られる　（心身の機能の、知性と情意との未分化）
- 音声の高低の起伏が激しい／話の内容が幅が狭い　（主情的）
- 会話が派手／話題が家庭的なものに限られる　（内閉的）
- 愚痴／蔭口　（被抑圧的）
- 隠蔽の方法として話題をそらす／見せかけの謙遜　（自己劣等感）
- 会話に際して発揮せられる心にもない迎合性・追従性／その結果としての骨子のあいまいなまわりくどさ　（娼婦性）
- 断定中絶あるいは断定曖昧の「……というような気がするんですが……」等の口調／廻りくどく、接続の語が多い／口調の割に話の骨子の運ばれるテンポが遅い　（警戒性）

批判的でない項目もあるが、大部分は批判的な角度からとりあげられている。

また、同じ号に、円地文子氏他3名の女性の「女からみた女の言葉」という座談会がのっている。ここでは、日本の場合は、自然の優しさから女らしさや女言葉が出てきたというよりも、一つの女らしさという概念がことに男の側にあって、それに女が合わせていっているということ、ていねいさの度合の方に気を取られてしゃべる内容が分らなくなってしまう、思考が妨げられてしまうということ、女性が言葉を使う技術に慣れていないということなどが話し合われている。

また、最近では次ページのような投書があった。投書文Aにおける女子中学生の男言葉は、女性語に対する若い世代への批判的行動と見ることができる。第Ⅳ章の年齢別言語行動図でみたような、生涯で最も活発な言語行動を行なう10代の女性たちが、その本能的な発現として、あるいは直感的に選んだ最も適切な手段として、男言葉を選んだものであろう。

投書文Bの主婦は、お説教という、効果的なコミュニケーションを必要とする場面で女性語を捨てたものである。

ひととき

娘の「ふざけるなよー」

中一の娘と買い物に行きました。おしゃれの話だとか、食べ物のことだとか、たわいないことを話しながら歩いていたのですが、坂道のところで同級生のK君とばったり会った娘は突然、「○○、おまえ風邪治ったのかよー」と男言葉で叫んだのです。私は瞬間、予期せぬ言葉にだれが発したのかと驚きました。K君は「うん」と少々テレ気味に笑い、足ぼやに角を曲がって行きました。その後ろ姿を見送って、改めて娘の顔を見てしまいました。

また別の大雨の日、校門のところで友人とぶつかった娘は、その拍子に持っていた上履きを水たまりの中へ落としてしまったそうです。黙って通りすぎる友人に、「ふざけるなよー！」と叫んだといいます。「ごめんなさいも言わないんだから」と言いますが、あまりの品の悪さ、乱暴な口調にあいた口がふさがらないとは、まさにこのことです。

「どうしてそんな言葉を使うのよ」と語問調になる私に向かって、娘は平然と「だってこれ普通だわよ。学校ではみんな使っているもの」と言います。

この話を友人にしたら、みんなも異口同音、「同じだわ」とため息まじりに言いました。今どき女の子たちの男言葉は、通常語なのだというのです。でも「なんだよー」から「うるせえ」となると、だれと話をしているのかと悩んでしまうと聞いて、「お宅もなの」と驚いたり、なかばほっとしたり。「学校だけでしか使わないから大丈夫」と言われても、娘個人の言葉の乱れと簡単にすませられない、複雑な思いがします。単に正しい日本語を話しなさい、女の子らしい(?)言葉づかいをしなさいと言っただけではすまないような気がするからです。「おはようございます」。毎朝家の前を元気に登校していく彼女たちの姿を見送って、あの子たちも親の目の届かないところでは、威勢よく男言葉で話をしているのかしらと、ふっと思ってしまうのごろです。

（東京都渋谷区　□□△△　主婦・41歳）

投書文 A　1988.3.23　朝日新聞　家庭面　「ひととき」

ひととき

男言葉やはりさわやか

二十三日付「ひととき」の○○さん。中学生の娘さんの男言葉を心配しておられましたが、私は男言葉大好きオバサンです。

三、四年前、私は、子供をしかる自分のねちねちした言葉遣いがいやになりました。

「ああでしょう、こうでしょう。だからお母さんはうるさく言うのよ。あなたがよその子だったら何も言わないわ。良い子になってほしいと願うから、ついつい言うのよ。こんな注意を受けたの今回がはじめてではないわね。この前も同じことで注意されてるわ」

女言葉で文句を言いはじめると、なぜか私の場合、とどまるところを知らず、現在から未来、そして過去の失敗まであげつらってしまうのです。

中学生になった子供は「わかっている」と反抗して、暗くうちへうちへとこもってゆきます。これではならじとある日、私は一念発起。男言葉でお説教することにしました。

「何やってんだよォ。焼きそばはなァ、最初に野菜をきざんで下準備をしてから始めるもんだよ。わかったかァ」

また、テストの点数が悪いとき、

「てめェ、こんな点数とって希望校に入れると思ってんのかよ。しっかりやらなきゃダメじゃねえかよォ」

とやるのです。

これが女言葉だったら、ぐちゃらぐちゃらと納豆の糸のようにぐちが続いたあと、だからあなたはダメなのよと言わずもがなの言葉でしめくくりとなります。

男言葉は、しめりっけがなく、スカッとさわやかではありませんか。男言葉は簡単明瞭（めいりょう）で解放感があり、その上おもいやりがあります。

以来、私は明るく、クヨクヨしなくなりました。でもあまり使い過ぎてもよくないらしく、十五歳の息子はすでに女性に失望して一生独身だなんて言っております。

（神奈川県藤沢市　○○××　主婦・50歳）

投書文 B　1988.3.28　朝日新聞　家庭面　「ひととき」

Ⅶ　模索する女性語

男女のことばの上での接近が言われ、女性語に対する批判や忌避の動きもある。主たるにない手である専業主婦層も、有職女性の増加や、主婦自身の社会的活動への参加など量的質的にも変化している。しかし一方で女性語の男性語化や脱女性語化にブレーキをかけたい心理も存在している。女性語は今後どのように変わってゆくのか、まさに模索状態にある。

ストレートな男性語化は、臨時的突出としてはありえても、広く一般にゆきわたる傾向とはなりにくい。Ⅳ章でみたような“まじり合い”が、“脱性的語彙”としてふえてゆくということは大いにありそうだ。語彙としては女性語を脱しても、音調や抑揚で女性らしさを加える余地は残されているわけだが、この“脱性的語彙”という方向は、話し方の速度、抑揚や音調、構文や話の順序・構成、論理などまでを広く包含して進んでゆくと思われる。

ところで、Ⅳ章で、男性のことばの女性語化のところで、柔かさや丁寧さを評価されて、“女性”の部分は削除される“脱性的語彙”についてふれた。これを第三の方向として注目してみたいと思う。

たとえば、木村治美氏の文章の文体をとりあげてみる。木村治美氏の『黄昏のロンドンから』など一連のエッセイが評価されている要因の一つに、改行が多く、です、ます体を基調として「～どうしたとお思いになりますか？」「～たのです」「～のでした」「～と申しました」等を挟み、「話はちがいますが」「話が脱線しかかりました」「いや、話がそれかけました」で軽く変化してゆく話線、多く挟まれる会話や話体のもの言い、等々の特色ある文体があげられよう。それを、「男には真似できない巧みさで甘えを随所にのぞかせ、男性をくすぐる魅力を十分に備えている」「まわりの人から必要とされ、安泰の地位に坐る中年主婦の、落ちついた、やさしい調子をかもし出している」「女性であることを卒直に認めたこの文章が、世に受けているということは、世の期待する女性像がこの文によく表われているから、ということができるのではないだろうか」と評価する見方（注 14）があり、賛同する人も多かろうと思う。しかしそこから“女”というフィルターを取り去って、単に「木村さんの文体は、話しかけるような自然さ、なめらかさに特徴があります」（注 15）と評することもできるわけであるし、本質

的な文体の特色に迫ってゆくためには“女”であるからという見方は曖昧になりがちでもある。

むしろ、女性的特徴と思われていた言葉の特色を外に拡げて、一つの効果的なエッセイの文体として確立した時に、その評価は、“女らしさ”ではなくて、「話しかけるような自然さ、なめらかさ」をエッセイの文体に持ちこんだ冷静な計算に対してなされるべきである。これも効果的なエッセイを書くときの文体として、話しかける調子や変化に富む話線などを“脱性的表現”として登録したものというふうに考えたらどうであろうか。

もう1つ別の例をあげる。『言語生活』262号（1973）の、「女のことば・男のことば」という座談会で、大石初太郎氏が次のような指摘をしておられる。

（前略）それから話法と言いますかね、しゃべり方の一つの特徴として、これももちろん個人差があるのですが、一般的に女性は直接話法復唱型とでもいうか、「私が何々と言ったのですよ。そうしたら彼女は、あらだってこうなのですよ、なんて言った」というような、しゃべったことばをそのままね、そういうしゃべり方がわりあい多いんじゃないか。男性は「いや、二人は話したけど意見が合わなかったね」ですんでしまう。そんなことでも女性の話はことば数が多くなったり、とにかく非常に具体詳密で、即事即物的な感じだという気がしますけど。つまり抽象化があまり得手でない。

まず、私もこの現象には個人差が大きいと思うのであるが、ともかく、この指摘を受け入れるとする。そして、たとえばラジオの相談番組で、よくそのようなタイプの話し方をする相談者の話を耳にするので具体的に理解できるのだが、解答者や進行役は、番組進行の必要上どうしても「手短かに」「結局どうなったんですか」「今、一番お困りの事は何なのですか」と切り込むのである。しかし、相談というのはまず相手の話をよく聞くことで半ばその役割を果たし終えているといってよく、相談者の声の質や話し方でいろいろな付加情報が得られる。何よりも具体的詳細な描写で相談者の生活の背景も見えてくるし、答え方もおのずと具体的で詳しいものになると考えられる。

すなわち、そのような具体的詳密な即事即物的な話し方にも価値を認め、或る場面や場合で必要とされる話し方として“脱性的表現”として登録し、男女双方のことばの財産としてはどうかと思うのである。大石氏もこの発言内容を見るかぎり、それに対して非難や批判をされているわけではないのである。能率よく、結論だけを、といっても、たとえば推理小説は犯人を知るためだけに読むのではないのと同じで、場合によるのである。

途方もないたとえかもしれないが、平安期に“女手”として私的領域にとどまっていた平仮名文字が、“女”という形容をはずされて、その自由さ、便利さ、わかり易さが評価されて広く国民的財産として使われるようになったという歴史を思い出す。

第Ⅰ章の＜男女のことばの歩み寄り＞とは、男性が女性語に、女性が男性語に近づくことのみを意味するのではない。女性語と言われるものを洗い直して価値を見出し、“女らしさ”とは全く別の次元で評価してゆく一方、“ことばのまじり合い”のように、性に無関係に使用される場を重ねることによって自然に男女双方から選択された言葉や表現を、一つでも多く増やしてゆくことなどが、模索期の今、ざしている方向なのではないかと思われる。

＜注＞

（注１）　文化庁「ことば」シリーズ12『話し言葉』（大蔵省印刷局　1980）

（注２）　この調査は、『図説日本語』（角川書店　1982）に収録されているものからとった。「男性語化した……」という標題も、『図説日本語』に付されたものである。

（注３）　田中章夫「敬語論議はなぜ起こる」（『言語生活』213号　筑摩書房　1969）で紹介されているもの。

（注４）　同上

（注５）　「女性語」の範囲は単語レベルから表現や音調のレベルまで様々だが、ここでは狭く、女性特有の単語ないし女性が多く使用する語彙（人称代名詞・終助詞・感動詞・敬語など）等、形の上で把握しやすいものを中心としている。

(注６)　林四郎　『言語表現の構造』（明治書院　1974）所収のデータ。

(注７)　六角形の目盛りは、最大値を10代女子の「読む」という言語行動を行った者の割合である57.8％とし、最小値60代女子の「職場（学校・会合）で話す」という言語活動を行った者の割合である10.0％として、その間をA～Eの５段階に分けて目盛りとしたものである。

(注８)　井出祥子他３名による文部省科研費特定研究「情報化社会における言語の標準化」研究成果報告書　1985。

(注９)　関係部分だけの数値(％)を紹介しておく。

	話し手＼「行くのか」	いきます	いかれるの	いきますか	いかれますか	いらっしゃいます	いらっしゃいますか
父母会での父母	男　性	16.67					33.33
	働く女性		11.1	11.1		22.2	22.22
	主　婦	3.57	7.14	7.14	10.71		10.71

(注10)　井出祥子他編、『主婦の一週間の談話資料・解説・本文篇』（文部省科研費特定研究「情報化社会における言語の標準化」総括班刊行物　1984）中の資料。

(注11)　駒野陽子「『主婦論争』再考」（上野千鶴子編『主婦論争を読む Ⅱ』勁草書房　1982　所収）

(注12)　上野千鶴子「解説　主婦論争を解読する」（注11の文献中に所収）「梅棹忠夫」とあるのは、同書のPart Ⅰ の方にある梅棹氏の論「妻無用論」中からの引用であることを示す。また傍点は原文のもの。

(注13)　『言語生活』28号（筑摩書房　1954）第Ⅲ章で言及したものと同じ。

(注14)　井出祥子『女のことば・男のことば』日経通信社　1979。

(注15)　木村治美『しなやかに女の時間』（集英社　1974）文庫版あとがき（藤原房子氏担当）の評語から。